4月から、新しい常設展、そして版画展がはじまります。春風に誘われて、小高い丘の美術館へ足を延しませんか。

展覧会のお知らせ

常設展示

「小川原脩記念美術館開館15周年記念　自伝風な展覧会―私の歩いてきた道」

会期：開催中4月20日（月）まで

「小川原脩自伝風な展覧会―春・水辺」

白い季節が終って訪れる春を強く意識していた小川原脩。春から初夏へ、季節を映す“水辺”を軸に小川原の画業を辿ります。

会期：4月25日（土）～7月12日（日）

企画展示

「マイコレクション展」

昨年度の新収蔵品を中心に、当館初公開の作品を多数ご紹介します。

会期：開催中4月20日（月）まで

「武田志麻版画展～雲海のシンフォニー～」

赤井川村在住の木版画家・武田志麻さんの作品展です。

会期：4月25日（土）～7月12日（日）

アート・イベントのお知らせ

土曜サロン

4月11日（土）14時～15時「印象派の旅（5）地中海の求道者セザンヌ」

講師：柴　勤（当館館長）　会場：当館映像ルーム　聴講無料

ワークショップ『むつ先生と（アートで）あそぼう！』

5月5日（火・祝　こどもの日）

こどもから大人まで楽しめる作品づくりをします。写真の切り抜きからイメージをふくらませて、自由に描いてみよう！むつ先生が楽しく教えてくれますよ。

時間：9時～15時30分（時間内にいつでも参加可）

講師：宮崎むつさん（画家）　　会場：当館ロビー

参加費無料・申込み不要　♪こどもの日は小中学生入館料無料です♪

「ふるさと探訪」参加者募集

今年も春から秋にかけて4～5回、自然観察と軽登山を兼ねた活動を行います。今年はニセコ・羊蹄の外にも出かけ、さらに歴史的な要素も加える予定です。詳細は風土館にお問い合わせ下さい。参加ご希望の方は、4月11日（土）までに風土館にお申込みください。

■費用／年間千円（保険代、資料費、通信費）
■定員／20名
■お問い合わせ／倶知安風土館　☎22-6631

ミュージアム通信

小川原脩記念美術館
☎21-4141　FAX 21-4142
URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/ogawara-museum/

倶知安風土館
☎22-6631　FAX 22-6632
URL www.town.kutchan.hokkaido.jp/culture-sports/kucchan-huudokan/

開館時間は9時～17時
（入館は16時30分）
4月の休館日
7, 14, 21 ～ 24, 28日

■木田金次郎美術館☎0135-63-2221
木田金次郎　百花繚乱
会期：4月2日（木）～7月26日（日）
「岩内派」の誕生
会期：4月25日（土）～5月24日（日）

■荒井記念美術館　☎0135-63-1111
今年度は4月25日（土）より開館します。
ピカソ版画常設展「線の魔術師」
会期：4月25日（土）～7月12日（日）
西村計雄常設展「自然に寄り添って」
会期：4月25日（土）～8月23日（日）

■西村計雄記念美術館☎0135-72-2525
西村計雄・画業をたどる展覧会
「花～可憐で愛すべきもの～」展
会期：開催中7月12日（日）まで
おやこで楽しむ展覧会
「ときにはコレクターのように」
会期：開催中7月12日（日）まで

■有島記念館☎0135-44-3245
「山下隆博写真展『吹雪の日／凪の海』」
「新見亜矢子作品展」
「平成の『生れ出づる悩み』2014」
いずれも会期：開催中6月7日（日）まで

海と山と田園と　－ミュージアムロード情報－

町長室から

西江栄二

今では年間150万人の観光客が国内外から訪れる我がまち倶知安町は、雄大で美しい山麓や田園を持つ自然環境、そして新鮮で美味しい農産物が豊富な素晴らしい町であります。

静かに降り積もるパウダースノーが世界を魅了し、ひらふスキー場地域はかつてないほどの数多くの外国人客でにぎわい、国際リゾート地としての基盤が確立されつつあります。

また、今後、15年ほど先には北海道新幹線の札幌延伸により新幹線駅ができ、後志の表玄関として東北や関東圏などのさまざまな地域との交流、そしてさらに、北海道横断自動車道も完成の時を迎えることとなり、夏冬を問わず一年を通じた地域観光の発展に期待でき、将来を担う子どもたちが大きな希望をもつことができる、無限の潜在能力を秘めた町であります。

我が倶知安町が有する大きな「可能性」を最大限に生かすためにも、優れた地域資源を大切にしながら、その享受者となる町民の皆さまと未来につながる「まちづくり」に全力を尽くしてまいります。

町民の皆さまの一層のご理解とご協力を心よりお願い申し上げる次第であります。

（平成27年度町政執行方針より一部抜粋）

感動の場 ― 点

『みずばしょう』

制作年不詳　小川原　脩　画

毎月1点、小川原脩の作品を紹介している『感動の場―点』。このタイトルは小川原脩本人によって名づけられた。「点と点が結び付き合い、面として広がりを持つ。それは美術館という器がそうであってほしい」という思いが込められている。これまで紹介した作品は色紙やスケッチ含め200点におよび、有志の方によって手製の冊子にまとめられている。美術館で自由にご覧いただけるので、ぜひ手に取っていただきたい。

今回紹介する作品は、雪解けが進むと同時にあらわれる早春の花、ミズバショウ。ミズバショウをモチーフとした作品は大きな作品から色紙まで、制作年代もさまざま、本欄にも過去5回登場しているが、まだ紹介していない「みずばしょう」があるほどで、特に好んで描いていることが伺える。この作品は6号という小品で、黄色の花部、白い苞（ほう）、葉を縁取る柔らかな線、背景に薄く纏うような淡い色の絵の具が、晩年の作品の特徴を思わせる。

一点、一点、同じ題材でありながら、少しずつ変化を加え挑戦を繰り返し描く。比較的小さな作品には、大作には現れない遊び心が見られ、愛らしさが漂う。

ふるさと探訪

385回

―物語―

白い羊蹄山に薄くもやがかかるようになると思い出す。数年前のちょうど今頃、古民家移築が専門の工務店の社長さんから、倶知安町内の農家を歴史の証拠として一般公開したいとの相談を受けた。作業の都合で公開は実現しなかったが、一連の作業を見学し、記録させてもらったことがあった。

件の家は明治34年に建てられた開拓農家で、壁が取り払われるにつれて見事な柱組みを現わした。黒光りする大黒柱はエゾマツの一辺が30㌢を超える代物。梁には太いハリギリやキハダ材が多く使われ、断熱材として壁に多量のヨシの穂が入れられていた。

当時は家を建てるとき、運搬の手間を省くために近場で木を伐り、敷地内で製材をしたものだという。しかしこの家の材は周囲に生える木ではなく、尻別川を隔てた羊蹄山の中腹に生える樹種が主に使われていた。どうも辻褄が合わない。川を渡して材を持ってきたのか。現物を前にして、棟梁と二人でアタマをヒネったことだった。

質の良い古民家は本州以南よりもむしろ北海道に多く残る。と言うのは、開拓当初の困難を乗り切ると、故郷から大工を呼んで家を建てるのが一般的だったからだ。そのため、道内では全国あちこちの伝統的な建築様式で家が建てられ、加えて質の良い材が豊富に手に入ったこともあり、保存や再利用に値する古民家が多く残されている。

例の家を倶知安町内で使わないものかと友人や知人に尋ねた。決してオカネでは買えない「物語」がついているのだ。料亭や観光で使えばとても面白いことになるはずだ。しかし力及ばず、栗山町に住宅として移築された。かくして「物語」は失われてしまった。が、家自体が再利用されただけでも喜ぶべきなのだろう。